

■部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」平成30年度開講科目  
(教室などは変更されることがあるので、必ず開講部局でご確認ください。)

□必修科目

文学部04180031

准教授 堀江宗正ほか 「死生学概論」(死生学の射程)2単位 S1+S2 木2 法文二号館一番大教室

死生学に関連する研究をおこなっている文学部・人文社会系研究科の教員が、死生学の主なトピックを取り上げて、現在の研究状況を概説する。それぞれ、人間の死と、死にゆく過程での生をめぐる諸問題、またそれらに関する思想や実践が取り上げられる。死生に関する多様なアプローチを学び、学際的思考の基礎を養う。なお、本講義は「応用倫理概論」と共に、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

- 第1回 4/5 堀江宗正 死生学とは一人間の生と死
- 第2回 4/19 池澤優 死生学と宗教—《死者性》の視点から
- 第3回 4/26 榊原哲也 生きる意味を支えるもの—現象学からのアプローチ
- 第4回 5/10 早川正祐 ケアの死生学—病苦の語りとケア
- 第5回 5/17 白岩祐子 死別の心理—犯罪被害者遺族の立場から
- 第6回 5/24 武川正吾 生と死の社会学
- 第7回 5/31 蓑輪顕量 仏教からみた死生
- 第8回 6/7 芳賀京子 古代ギリシアの死と美術
- 第9回 6/14 鉄野昌弘 『万葉集』の死と生
- 第10回 6/21 堀江宗正 死生にまつわる宗教心理
- 第11回 6/28 高野明(ゲスト) 自殺に関する研究と対策
- 第12回 7/5 林伸宇(ゲスト) いのちの教育
- 第13回 7/12 会田薫子 臨床現場の死生学

文学部04180061

教授 池澤優ほか 「応用倫理概論」(応用倫理入門) 2単位 S1+S2 金3 法文二号館一番大教室

科学と技術が我々の生活を飛躍的に便利にし、膨大な情報をもたらし、寿命を延ばすに従い、これまでは考えられもしなかった様々な問題が生まれてきた。果たして人間にとって科学技術とは何なのか、何であるべきなのか。いま現在生きている人間たちだけの経済や効率を技術的に優先させた合理性は、はたしてまだ存在しない次の世代に、理不尽な負担を押しつけることにならないのか。そうした哲学的・思想的であると同時に実践的・現実的な諸問題を根本から問い直すべく、生命倫理、環境倫理、技術倫理、情報倫理、さらには世代間倫理といった、いわゆる「応用倫理」といわれる新しい学問領域が、いま強く求められてきている。本講義は、その分野に関する俯瞰的な概説を行うものである。

応用倫理は、本来的に幅広い分野を包含し、多様な方法論を必要とする分野であるため、本年度はオムニバス形式で生命倫理、臨床倫理、環境倫理、研究倫理、現代倫理、技術倫理に関して順次講じていく予定である。担当講師と講義内容は以下の通りである。

- 第1回 4月6日 池澤 優(文学部教授)「イントロダクション」
- 第2回 4月13日 福永 真弓(新領域創生科学研究科准教授)「環境倫理(1)」(環境正義の射程と声)

- 第3回 4月20日 福永 真弓「環境倫理(2)」(場所の記憶の贈与と「共に在れる」こと、「在り続けること」を可能にすること)
- 第4回 4月27日 小島 毅(文学部教授)「環境倫理(3)」(環境と文化)
- 第5回 5月11日 西村 明(文学部准教授)「戦争と倫理」(たましいへの感受性—爆心地と戦地の慰霊から)
- 第6回 5月25日 出口 剛司(文学部准教授)「現代倫理」(愛するということと悪について—エーリッヒ・フロムの思想)
- 第7回 6月1日 堀江 宗正(文学部准教授)「世代間倫理」(「反原発運動の倫理」を考える)
- 第8回 6月8日 池澤 優「研究倫理」(社会制度としての研究・学問)
- 第9回 6月15日 池澤 優「生命倫理(1)」(生命倫理の成立と倫理委員会)
- 第10回 6月22日 池澤 優「生命倫理(2)」(標準的生命倫理の思考法)
- 第11回 6月29日 池澤 優「生命倫理(3)」(生命倫理の現在)
- 第12回 7月6日 会田 薫子(文学部特任教授)「臨床倫理」(医療とケアの意思決定支援)
- 第13回 7月13日 池澤 優「まとめ」

(担当教員と順番は変更することがある。)

なお、本講義は「死生学概論」とならび、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

#### □選択必修科目

文学部04180051

特任准教授 早川 正祐 「死生学演習Ⅰ」(病いの語りをめぐる倫理) 2単位 A1+A2 金4 法文一号館219

人間は、病いととも生きていくことを余儀なくされたとき、これまで自明視していた自分の人生の意味を深く問い直すようになる。このような意味の問い直しの過程で、当事者が語るということや他者がそれを聞き届けるということは、極めて重要な役割をもっている。しかしながら、ここで注意すべきは、病いの苦しみを語ることやそれを聞き届けることが、多くの場合、困難に満ちたものになるという点である。それゆえ、その困難さを念頭に置きつつ、病いをめぐる体験とその意味について考察することが求められる。

そこで本演習では、病いに関する物語論の古典であるアーサー・フランクの『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』=Arthur W. Frank, *The Wounded Storyteller: Body, illness, and Ethics* を講読する(訳本でも可)ことで、病いの語りがどのような複雑な意味と効果をもつのかをその社会的含意も含めて考えていく。より具体的には、病いの語りの三類型である回復の語り・混沌の語り・探究の語りがどのようなものであるのか、また相互にどのような関係にあるのかを考察する。それと同時に、コミュニケーション・身体・脆さ(vulnerability)・傾聴・証言・苦しみ・多声性といった臨床倫理における重要概念が、どのように捉えられているのかを検討する。とりわけ、ポジティブな回復の語りのはらむネガティブな性格や、私たちの身体や生産性重視の社会がはらむ閉鎖的・排他的な側面等を批判的に見ていく。そのことを通して、従来の臨床倫理では見落とされている、病いの複雑な体験に根ざした倫理や責任のあり方、またコミュニケーションのあり方を根本的に考察する。

文学部04180052

准教授 堀江 宗正 「死生学演習Ⅱ」(スピリチュアリティ研究) 2単位 S1+S2 金2 法文一号館116

スピリチュアリティについては、哲学、宗教学、心理学、社会学など、様々な分野から研究が進んでおり、すでに膨大な文献がある。さらに、それは理論的、思想的な側面と、死生学などの臨床場面での応用の面と、ポピュラー文化の現象という面がある。今期はとくに現代的な現象を具体的に知り、それに関する歴史的背景や心理学・社会学による分析・解釈について学び、これらを全肯定も全否定もせず、冷静に議論する姿勢を養いたい。

#### 文学部04180053

教授 池澤 優 「死生学演習Ⅲ」（死生学基礎文献講読） 2単位 A1+A2 金3 法文一号館319

死生学の重要文献を日本語で講読する演習。講義形式と演習形式を併用する。

本演習は今まで、シリーズ『死生学』全5巻（以上2012年度）、アリエス『死を前にした人間』、ゴラー『死と悲しみの社会学』、キューブラー=ロス『死ぬ瞬間』、加藤周一ほか『日本人の死生観』、エルツ「死の宗教社会学」（以上2013年度）、ニーメイアー『喪失と悲嘆の心理療法』、樽川典子『喪失と生存の社会学—大震災のライフ・ヒストリー』、デーケン『新版 死とどう向き合うか』、シュナイドマン『シュナイドマンの自殺学』、新谷尚紀『お葬式』（以上2014年度）、清水哲郎『ケア従事者のための死生学』、平山正実『死生学とはなにか』、石丸昌彦編『死生学入門』、岸本英夫『生と死』、竹内整一『花びらは散る 花は散らない』、島藺進『日本人の死生観を読む』、森岡正博『生者と死者をつなぐ』（2015年度）、ジャンケレビッチ『死』、ヴィクトール・フランクル『死と愛—実存分析入門』、宇都宮輝夫『生と死を考える—宗教学から見た死生学』、澤井敦・有松賢『死別の社会学』、高橋祥友『自殺予防』（以上2016年度）、アーネスト・ベッカー『死の拒絶』、門林道子『生きる力の源に—がん闘病記の社会学』、山本俊一『死生学のすすめ』、高橋聡美編『グリーンケア—死別による悲嘆の援助』（以上2017年度）を講読してきた。

講読する書は多方面に及ぶが、現代的な諸問題に対面する中で、死生学という領域が如何なる視点と方法論を開拓しようとしているかを考えてゆくのが基本的な目的である。

#### 文学部04180081

教授 小松 美彦 「応用倫理演習Ⅰ」（科学的生命観と人生論的生命観Ⅲ） 2単位 A1+A2 水4  
法文一号館116

従来の米国型生命倫理学では、そもそも「いのち・生命」が何であるかはほとんど論じられてこなかった。また、近年のバイオテクノロジーと先端医療の飛躍的な進展により、「いのち・生命」は科学でのみ解るかのような風潮が蔓延しているように思われる。しかし、さまざまな人文学もまた、「いのち・生命」を探究してきたのである。

そこで、「いのち・生命」に関して自然科学と人文学とがそれぞれ探究してきた内実を検討し、すなわち、科学的生命観と人生論的生命観とを比較検討し、科学的生命観の限界を考察する。そしてそのうえで、今日の生命倫理問題を考察する。

#### 文学部04180082

教授 池澤 優 「応用倫理演習Ⅱ」（環境倫理文献講読） 2単位 S1+S2 月5 法文一号館219

いわゆる環境倫理と呼ばれる分野における古典を日本語で講読する演習。講義形式と演習形式を併用する。

本演習では今までJ. Miller, D. S. Yu, & P. van der Veer ed., Religion and Ecological Sustainability in China, M. Tucker & D. Williams ed., Buddhism and Ecology: the Interconnection of Dharma and Deed（以上2015年度）、リン・ホワイト『機械と神—生態学的危機の歴史的根源』、ロデリッ

ク・ナッシュ『自然の権利』、アラン・ドレングソン、井上有一共編『ディープ・エコロジー—生き方から考える環境の思想』、ピーター・シンガー『動物の解放』、J. E. ラブロック『地球生命圏—ガイアの科学』、トマス・ベリー『パクス・ガイアへの道—地球と人間の新たな物語』（以上2016年度）、ファン・ポッター『バイオエシックス—生存の科学』、アルド・レオポルド、『野生のうたが聞こえる』、岩崎茜『アルド・レオポルドの土地倫理—知的過程と感情的過程の融合としての自然保護思想』、石山徳子『米国先住民族と核廃棄物—環境正義をめぐる闘争』、ジョン・パスモア『自然に対する人間の責任』、鬼頭秀一『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』（2017年度）など、環境倫理に関する著名な著作を講読してきた。本年度も継続して環境倫理における「古典」を講読していく。

今までの講読で明らかになったのは、いわゆる応用倫理と呼ばれる分野の中には、意識的である場合も無意識的な場合もあるにせよ、何らかの宗教的な感覚が入りこんでいるということであろう。現代社会における宗教は、既に宗教であることを標榜する団体によってのみ担われているのではない。本人が意識していない場合でも、宗教的な論理や感覚が非宗教的（世俗的）な領域に浸透しており、それが現代における宗教という景観の一面を構成しているのである。講読を通して、そのような現代的宗教性を明らかにしていきたいと考えている。

#### 文学部04180083

准教授 堀江 宗正 「応用倫理演習Ⅲ」（環境思想研究） 2単位 S1+S2 火2 法文一号館117  
宗教・哲学・倫理の領域にわたる自然・環境・生命に関する思想を探究する。

今期は「日本人は森や里山を大事にしてきた」という言説を再考するための準備作業として、環境史やエコクリティシズムの研究を見ていきたい。それを通して、批判的な人文知が人と自然の持続可能性にどのような役割を果たせるのかを考えたい。

#### 文学部04180084

特任教授 会田 薫子 「応用倫理演習Ⅳ」（生命倫理と臨床倫理の現在） 2単位 A1+A2 火5  
法文一号館217

医療技術の高度化に伴い、従来は困難であったことが克服されるようになった一方、倫理的空白地帯が次々と生まれている。医療は自然科学を基礎とした医科学の知識をもとにして人間の健康を回復・維持増進しようとする分野であるが、医科学が実現できることと社会的に実施可能なことはイコールではない。しかし、どこで線を引くべきか、倫理的判断が容易でない課題が増えつつある。

個人や集団の心身が健康であるか否かは、種々の社会的事象の原因でもあり結果でもある。また、より望ましい身体の状態に関する人々の欲求は、社会的な認識の変化によって変化する。したがって、社会的な認識の変化は倫理問題の性質と射程に直接的に影響する。

本科目では、bioethicsおよびclinical ethicsのテキストを読みつつ、現代の医学・医療と社会および倫理観の関係や関連する諸問題について考察を深める。文化差による問題の把握の仕方の相違を理解しつつ、事象の多面性を認識し、文化的な背景が個人の倫理観・死生観へどのような影響を及ぼしているかを考える。また、社会的に形成される「常識」を疑い、相対化する。デジタル時代に特有の問題を含め、急速に進展しつつあるこの分野の問題をリアルタイムで考察する。

□選択科目

文学部04180041

非常勤講師 澤井 敦 「死生学特殊講義Ⅰ」（死と不安の社会学） 2単位 S1+S2 月2 法文一  
号館112

普段あまり考えることはなくても、何かのきっかけから、自分はなぜ生きているのだろうと「生きる意味」を問う瞬間が誰の人生にもあるだろう。そうした問いについて考える時、「生」には「死」という終わりがあるという事実が否応なく私たちに迫ってくる。

とはいえこの死、とりわけ自分の死について、普段あまり考えることはないかもしれない。ただ、あまり考えることがなくても、死という終焉が必ず訪れるという事実は、漠然とした不安感となって、私たちの生をなかば無意識のうちに覆うものとなる。

哲学・心理学・精神医学などにおいて、以上のような事態はさまざまなかたちで考察されてきた。ただ、この授業でとりわけ焦点を当てたいのは、端的に言えば、死や不安の社会的様相である。

死という不可解かつ不可知の現象は社会的にどのように処理されてきたのか・いるのか、また死を基底とする不安感や社会や文化の変動に応じてどのような様相を呈することになるのか。このような問いについて社会理論の観点から考察することがこの授業の目的である。

文学部04180042

特任教授・特任准教授 会田 薫子・早川 正祐 「死生学特殊講義Ⅱ」（臨床死生学・倫理学の諸問題） 2単位 S1+S2 水6 法文二号館一番大教室

臨床死生学および臨床倫理学の諸問題に関して、おもに若手研究者や外部から招いたゲストの研究発表とそれに基づく討議を行う。発表者およびテーマについてメールにて予め知らせるので、参加者はメールアドレスを予め担当教員に知らせ、発表予定のテーマに関して予習をした上で授業に参加することが望ましい。医療・介護の現場の実践者ないし現場に臨む研究者の発表が多く、現代社会における実際の問題について理解し考察を深めることを中心とするが、当該学問領域の理論的な進展も扱う。なお、発表者の都合により、授業時間が動いたり、別の日時を設定することがあるので、履修希望者は年度初めに予め担当教員に具体的計画について問い合わせること。

文学部04180043

特任教授 会田 薫子 「死生学特殊講義Ⅲ」（臨床老年死生学入門） 2単位 A1+A2 木3 法文  
二号館一番大教室

超高齢社会における臨床死生学と臨床倫理学の問いに関する理解と思索をめざす。

予定トピック：超高齢社会の医療とケアに関わる諸問題（人口動態、老いて行くプロセスの諸問題、医療と介護の制度、End-of-Life Care (EOLC) の概念、EOLCと緩和ケアとその心理・社会・スピリチュアル面の諸問題、生命維持とその差し控え・終了に関わる問題、尊厳死・安楽死など）

文学部04180044

特任准教授 早川 正祐 「死生学特殊講義Ⅳ」（共感とケアの哲学） 2単位 S1+S2 木3 法文  
一号館113

医療・福祉はもちろん、他の様々な場面で、共感やケアの重要性が盛んに指摘されている。にもかかわらず、それらの内実は十分には吟味されていない。こういった現状を踏まえ、臨床をめぐる倫理における鍵概念である「共感」と「ケア」について、それが指示する事象の豊かさを尊重しつつ、その意味内容を批判的に検討していきたい。

より具体的には以下のように講義を進める。まず英語圏で1980年代以降に登場してきたケアの倫理 (Ethics of Care) において、共感やケア、またそれらの概念と不可分な、感受性や受容性といった概念が、どのようなものとして捉えられてきたのかを検討する。とりわけ、ケアの倫理の代表的な論者であるキャロル・ギリガン、ネル・ノディングズ、エヴァ・キテイの議論を見ていく。その上で昨今盛り上がりを見せている (フェミニストによる) 社会的な徳認識論 (Virtue Epistemology) の知見を取り入れつつ、共感やケア (また感受性や受容性) の認知的側面に関する考察を、いっそう深く掘り下げていくことになる。その際、徳認識論の中心的な概念である「認識をめぐる責任」 (epistemic responsibility) や「認識をめぐる不正義」 (epistemic injustice) に関する最新の議論を主に見ていく。そうすることでケアの倫理 (また広義の臨床倫理) の新たな展開——認識論的な展開——を試みたい。

文学部04180045

特任准教授 早川 正祐 「死生学特殊講義V」 (自律についての関係的なアプローチの展開) 2  
単位 A1+A2 木4 法文一号館112

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきた「関係的な自律論」 (relational autonomy) について批判的に検討し、その臨床的応用も試みる。

従来の個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対して関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。講義では、関係的な自律論において、従来の自律論の中心的諸概念、すなわち自己決定・反省性・合理性・自己理解・統合性等がどう捉え直されているのか、またどう捉え直されるべきなのかを考察する。その上で、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的な意思決定プロセス (shared decision-making process) に相応しいものへと発展させる。

文学部04180046

教授 榊原 哲也 「死生学特殊講義VI」 (死生のケアの現象学) 2単位 S1+S2 金5 法文一号館312

看護ケア理論や看護ケアの質的研究において、現象学という哲学が注目を集めて久しい。それは、あらゆる事象を「生活世界」における「意味」体験の次元から捉え直そうとする現象学的哲学の営みが、個々の患者やその家族の「病い」の体験を理解する視点と、それに対処する方途を与えようと期待されているからである。

本講義では、「現象学」という哲学の基本的な理解をもとに、「ケア」がどのような営みであり、また死生のケアにはどのような視点が必要かを、受講者が理解できるようになることを目標とする。

自然科学的・医学的なものの見方の特徴を明らかにしたあと、そうした見方では捉えられない生活世界的意味経験とケアの営みを、現象学という哲学がどのように明らかにしていくのかを、主としてベナーの現象学的人間観と現象学的看護理論に即して概説する。さらに、わが国で近年展開されている現象学的看護研究を概観し、「死生のケアの現象学」のさらなる可能性について考えたい。

文学部04180047

非常勤講師 大塚 類 「死生学特殊講義VII」 (事例から読み解く生きづらさ) 2単位 S1+S2 木

#### 4 法文二号館二番大教室

私たちはさまざまな生きづらさに晒されています。児童虐待や発達障碍のような、周囲からも認知され、当人も自覚しうような生きづらさもあれば、「コミュ障」「異性にもてない」「毒親を持って余している」など、当人が自覚できなかつたり、したくなかつたりする生きづらさもあるでしょう。本講義では、私たち誰もが思い当たるような日常の生きづらさの事例に基づき、それらを哲学的な観点（自己意識、身体性、他者意識、世間、他者理解など）から考察することを試みます。そうすることで、生きづらさをより深い次元で捉えなおすと同時に、受講者ひとりひとりの自己理解や他者理解が深まることを目指します。

文学部04180071

特任教授 会田 薫子 「応用倫理特殊講義Ⅰ」（質的研究法） 2単位 S1+S2 火5 法文一号館217

社会における事象の捉え方には大別すると量的研究法と質的研究法があり、保健・医療・福祉また心理学分野においては特に数量的なアプローチが主流であったが、近年、個人およびグループ面接や観察によってデータを得る質的研究法の有用性が広く知られるようになり、この方法で研究に取り組もうとする研究者も増えてきた。しかし、手法・手続きが整えられ評価法も確立された量的研究法とは異なって、質的研究法を学ぶことは容易ではないと言われている。本科目では、質的研究法の入門編として、質的研究法の世界を概観し、質的研究法を用いた原著論文の詳細なクリティークを通して、質的研究法の特徴を理解し、研究法と論文作成法を具体的に把握し、また、事象の捉え方に関して視野を拡大することを目標とする。

文学部04180072

創域・准教授 福永 真弓 「応用倫理特殊講義Ⅱ」（生と場所の環境倫理） 2単位 A2 集中 教室未定

詳細はいましばらくお待ちください。

文学部04180073

非常勤講師 関 礼子 「応用倫理特殊講義Ⅲ」（〈環境—社会〉への語りと倫理） 2単位 A1+A2 木4 法文一号館113

環境とは社会である。この講義では、〈環境—社会〉をめぐる諸問題（公害や環境汚染、自然保護など）をめぐる人々の語りとしの全体性のなかから、〈倫理〉の位相を探り出す。特に戦後日本の急激な〈環境—社会〉変動のなかで、地域性や共同性に基づくローカルな価値が集権的公共性の価値の劣位に組み入れられることで、〈環境—社会〉が乖離していく状況を考察する。そこから、環境をめぐる現在の諸課題を明らかにする。具体的な事例として、水俣病や新潟水俣病、海浜埋立、大規模林道、メガイベント開発、原発問題などを扱う。

文学部04180074

非常勤講師 村上 靖彦 「応用倫理特殊講義Ⅳ」（現象学的な質的研究） 2単位 A2 集中 教室未定

現象学的な質的研究の方法論を習得することを目的とし、専門看護師へのインタビューの分析を主に用います（時間がゆるせばこども支援のフィールドワークデータも持ちいる）。急性・重症患者看護、がん看護、在宅看護といったいくつかの領域の専門看護師として指導的な立場にある人たちにお願いしたインタビューデータを用いて、現象学的な分析を試みる予定です。

もしくは保育園やこども食堂など地域での子ども支援に関するフィールドワークを用いるかもしれません。講義形式ですがデータの分析については参加者の積極的な参加を望んでいます。

#### 医学部02218

教授・准教授・助教 赤林朗・瀧本禎之・中澤栄輔・山本圭一郎「生命・医療倫理Ⅰ」 2単位 A  
2 金曜1・2 医学部3号館 S101

本講義では、保健・医療の分野においてしばしば生じる意思決定が困難な問題を、主に倫理的側面から検討する。授業では、医療倫理学の基礎理論を講義するだけでなく、具体的なケースを用いたディスカッションも行うため、受講者の積極的な参加が望まれる。

本講義は、将来に臨床や医療政策に携わる人にとって有益であるのはもちろんだが、それ以外の人にとっても、いろいろな立場の人との議論を通じて、自分の倫理的思考を見つめ直すよい機会となる。

教科書 赤林朗編著『入門・医療倫理Ⅰ〔改訂版〕』勁草書房

#### 医学部02246

教授・講師 上別府圭子・佐藤伊織「家族と健康」 2単位 A1 月1・2 医学部3号館N101講義室  
健康総合科学の対象としての、家族と健康の考え方の基礎を学ぶ。家族は社会を構成する最小単位であり、また、家族は一単位として健康総合科学実践の対象となる。国内外の、家族心理学・家族看護学・家族療法などにおける知見および理論を学び、さらに事例を通して、その実践の試みについての見識を深める。加えて、家族を健康総合科学研究の対象とする際に必要な基礎的知識と考え方を理解する。

#### 農学部060500021

教授 関崎勉「生命倫理」 1単位 S1 月曜5限 農学部1号館第8講義

ヒトはヒト以外の生命を喰うことによってしか生きられないという人間中心主義的な宿命を負う。一方、人間社会の利益、科学技術の進歩、ヒトとヒト以外の生き物との間での命の価値の違いなど様々な理由でヒトや動物の命の扱い方が異なっている。人の社会と人の生命における倫理問題だけでなく、生物資源問題、動物倫理、ヒトと動物の絆、食品安全、家畜防疫、感染症など、「食」に関わるさまざまな生命の関わり方を取り上げる。それらを様々な角度から実例をもとに聴講し、農における生命倫理として多層な生命をどう秩序立てて理解し、人類の福祉を追究すればよいかを、自身の専門分野とは異なる立場からの情報も取り入れて、これまでとは違う発想、価値観、文化、思想などについて考える機会とする。バイオテクノロジーと社会との接点の問題という性質では、A2タームの「技術倫理」と関連する。

#### 農学部

教授 根本圭介「技術倫理」 1単位 A1 月曜5限 農学部1号館第8講義

詳細は開講部局でご確認ください。

#### 教養学部08D1002

廣野「応用倫理学概論」 2単位 A1+A2 曜時限未定 教室未定

今日、クローン人間や動物の権利等、科学の進展と社会のあいだで解決しなければならない倫理問題が多く出現している。こうした課題にこたえるための努力が、生命倫理・環境倫理・情報倫理などの各現場から立ちあがってきたが、そうした動向についての基本的素養を身につけ



ることを目標とする。今年度は特に情報倫理を重点的に取り上げる予定である。

#### 教養学部08F1304

松本真由美「科学技術リテラシー論Ⅱ」 2単位 A1+A2 曜時限未定 教室未定

本講義では、担当主教員のほか、科学コミュニケーションが求められる現場の第一線で活躍するゲスト講師をお招きし、実践的な科学コミュニケーションについて学ぶ。学生は自らの科学コミュニケーター像を想定し、「伝える」「聞く」「質問する」「議論の調整」など科学コミュニケーションのスキルを養成するとともに、科学についての正しい情報をいかに社会に伝えるかを考察し、演習する。